

末黒野

すぐろの

創刊七十周年記念号 4月号 (通巻836号)



年詰まる

小川 玉泉

(名譽主宰)

海原へ翼を拡げ初日出づ

闇を裂く鳥の三声年立ちぬ
海原へ翼を拡げ初日出づ
口中に満つ三陸の酢牡蠣の香
煮凝に味深まりぬ真子鰈
風花のしきりや姉の小祥忌
本堂の凍てほぐすかに木魚の音

大晦日になると、気になるのが元朝の天気である。今年の天気は快晴で絶好の日の出日和になった。国道134号線の鶴沼歩道橋の上が絶好の観測地点である。東に連なる三浦半島の逗子あたりに顔を出す初日は、ゆっくりと海を染め、急に赤い翼を拡げた。荘厳の一瞬であった。

初 明 り

松本三千夫

磴 五 十 雪 洞 二 百 初 詣

去年今年星それぞれの位置に座し

一湾の凧ぎて遠富士初明り

江ノ電を二駅歩き初日の出

方丈の大屋根に二羽初雀
はたはたと羽音ゆたかや初鴉
ネクタイを締めて句会へ松の内
人日や妻の重みの籐寝椅子
倒れ木の山道塞ぐ青木の実
万年筆走る便箋寒灯
冬波の夜目にも白し久女の忌
眠れぬ夜森に貼り付く枯木星

地球儀

黒滝志麻子

(副主宰)

地球儀に戦火などなし注連飾
ひと軋みして海へ向く初電車
ひたひたと波打つ渚初明
一山を浄土と鳴けり初鳥
一島を置く一湾の淑気かな
花時計の三時を指すや冬すみれ
枯葦の倒れきつたる安堵かな
約束のごとく笹子の鳴きてをり
鳥容れてひかり一すぢ枯葎
鶏小屋の裸電球寒波来る
寒晴れや机上清めてより書けず
大寒の森一塊となり昏るる

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

初夢

松田泰子

数へ日の餅をしづかに焼いてをり
裸木に凜と山影立ちにけり
極月の黒き川面を覗きゆく
石路咲くや海見ておはす仏たち
山茶花の優しさに消ゆわだかまり
笹鳴の離ればなれに日暮れけり
山肌に山の影くる冬紅葉
凧を呼ぶ木となれり老いがたく
ことごとく枯れことごとく雑木山
初夢のさめてふるさと遠ざかる

浮寝鳥

森清堯

枯葎色に優劣なかりけり
枯野原分け入る人の背の広し
冬ざるる苑や鴉声のほしいまま
枯櫂黙の力を広げをり
浮寝鳥水の眠りを誘へり
踏み込んで強き弾力冬の草
万歩来て寒紅梅の一二輪
若水の手よりこぼるるひかりかな
元朝のかがやき残す二十日月
常ならぬ温さたまはる三日かな



暈の目

森清信子

七十周年迎ふる俳誌初御空
元日や聖書の葉新しく
初富士や松が枝移る尾長鳥
初東風や磨きぬかるる連子窓
野の草のやうに生きたしごまめ噛む
放たるる鶏に怯む子花八手
合掌造り粗く冷たき暈の目
白鳥の暮色引き合ふ瓢湖かな
臘梅の大樹にむせて長屋門
流れゆく冬霧に山沈みけり

冬の星

安齋久英

吊橋を仰ぐ山路や冬うらら
残照を水平線に冬の雲
湖暮れてこぼれんばかり冬の星
明けやらぬ湖逆しまに師走富士
去年今年八十路の夢の捨て切れず
夕星や盆の窪より冷え兆す
恙なき友の筆勢初便り
暮れなづむ連山の裾冬灯
極月や忍野八海人まばら
彩りの加賀麩を椀に三箇日

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



初夢 西川みほ

銃弾を追うて枯野へ犬走る
探梅や木椅子の香り新しき
善き年を乞へぬ手拔や年用意
賜はりし冬至かぼちやや刃の立たず
初夢に現れて黄泉路の友二人
綿雲を褥に富岳初景色
屋台占むる目なし達磨や初詣

初詣 堺昌子

拍手のひびけるあとの淑気かな
大釜の甘酒に列初詣
ひんがしの枝より咲きぬ加賀の梅
だて巻の腕あぐる嫁節料理
丸顔の祖母似の孫や小正月
大山のこま参道や冬の百舌
紅白の千両活けて蕎麦処

師走 吉田きみえ

枯菊の雨の重さを束ねけり
ゆつくりと曾孫を抱きて冬至の湯
一齐に船の汽笛や除夜の海
冬ざれや風筋変はる舫舟
母の忌や庭の水仙供花として
持てるだけ持つて師走のバスに乗る
枯河原小舟傾くまでに朽ち

青炎集

松本三千夫選



横浜 山咲和雄

二人とて取立ててせぬ年用意

読初は天声人語音読す

息白く靴ひもむすぶ手のおそし

予定なき自由時間や冬日和

干支の申墨あざやかに奴風

生きてゐることのうれしき寒さかな

横浜 外山節子

塔頭へ逸れて息継ぐ初詣

恙なく卒寿の夫と屠蘇酌みぬ

初風や相模野の風集めをり

すれ違ふ目が語りをり寒の入

野より摘み鉢より摘みて七日粥

まだ炬燵出ぬ間に電話切れにけり

横浜 高橋明

執念の俳句暮しや去年今年

神鈴をふりて初日を散らしけり

初句会句に憑れたる顔そろふ

初句会風一つなき日本晴

おだやかなる冬日の続き寒に入る

防寒着脱ぐより早く孫の顔

横浜 山口登

連風の揚がる尾の先富士の山

干支の猿七度出合ふ年男

街の灯を伝ひ伝ひて除夜の鐘

書き初めや墨痕滲む蘭亭序

窓拭きの漸う終はる小晦日

笹鳴きに歩みとどめぬ里の道

颯爽と渡航青年漱石忌

ロボットとしばしの会話街師走
煤掃きの古刹や門に猫たむる
微笑みの白衣観音初明り
参道の梅一輪の淑気かな
ストーブの煙屋根はふ蟹の家

横浜 前原 マチ

大網白里 亀卦川菊枝

鴉来て光啄む霜の畑
仕舞湯の初湯なりけり風の音
幼な子を抱きて初日を拝みけり
朝の卓七種粥の椀二つ
人日や短冊を切る紙の音
碧落の片雲返つる日和かな

横浜 早川八重子

一斉に港の汽笛年明くる
句心の生れては消ゆる寒さかな
短日の水の如くに流れけり
路地裏の日差しやはらか冬すみれ
塩分の取り過ぎ不可と初日記
日差し浴び春へ備ふる桜の樹

横浜 正谷 民夫

ぞんざいに冬至南瓜の転がさる
地吹雪上げて富嶽の男振り
扁額は天下禅林淑気満つ
休耕田の薄ら日つつくかじけ鳥
闇踏んで人集ひ来る里神楽
寒月下コンクリートの象がゐる

横浜 及川 照子

神杉の香り新たや初明り
経蔵の校倉造り初明り
空つ風屋根に石置く御師の家
三面のいづれも父似初鏡
寒牡丹たをやかに身をほぐしけり
たまゆらの光と消ゆる雪虫

日野 中村 月代

歳晩の肩のほぐる日差しかな
クレインの吊り上げたるか初日の出
願ひ事ひとつに絞り初詣
七十路の初夢空を飛びにけり
初旅やサミット有りし湖の宿
六つの花舞ひし露天や時忘れ

耕 土 集

黒滝志麻子選



横浜 佐々木永子

横浜 重田 修

逆さまの箒の如し枯櫛

冬ざれや野づらを渡る風の音

その年の自分史きざむ古曆

本棚の古書の匂ひや煤払

寒風や鯛焼二つ懐に

月に向け終の寒柝打ちにけり

山頂の雪遊ばせて山眠る

人の世の綾なす縁ふぐと汁

初夢や壺中の天に義母の顔
厚焼のだるま煎餅初大師

相模原 板谷 俊武

本間せつ子

道端に群れて明るき石露の花

切り株に鳥の遊べる冬田かな

廃屋の広き庭なり寒椿

凧をよけむと路地を曲りけり

夕暮れて鳩の一羽と別れくる

陽光や玻璃の聳く霜柱

年の夜や粹なポリスの人捌き

妄念を鐘で撞き出す年の果

壺乃重の姉妹譲らぬ草石蚕かな

息災と賀状に浮かぶ友の顔

浦安 東 正則

宮地 静雄

初夢の忘れて二度寝仕る

ドクターの励まし受くる七日かな

寒鴉ごみ出す吾とにらめつこ

初雀わが家の中を覗きをり

冬帝の給うて晴の日の多し

空冴えて月の切つ先極めけり

初春の金時山や鉈の音

太鼓の音心突き上ぐ初不動

山里や薄々煙る寒の雨

異国より独り息子や春隣

雁渡し

岡野里子

結界の石に凝りたる余寒かな
梅真白島に源氏の旗印
藤村の墓や老梅飛竜めき
鳥引くや岩間にひかる忘れ潮
点となる沖の釣舟風光る
遠富士の頂隠れ養花天
つくしんぼ一声重き黒毛牛
高階へ色押し上ぐる樟若葉

武者人形

小田嶋野笛

獺祭や全て手近に老いの部屋
ライオンは遠い親類猫の恋
囀や不動の髪に迦^か楼^ら羅^ら棲み
春昼の水跳ね散らし鯉の恋
掃除機を奏づるごとく春の塵
肘張つて箱より出づる武者人彫
梅雨寒や父祖伝来の長湯癖
蛩の一つは行方知れずかな

花大根

饗庭 蕙子

白梅や井筒にはづむ雀どち
山門の仁王眼を剥く余寒かな
野径ゆく二月の空の果て知れず
椿落つ夕べの闇を重ねつつ
山裾の風あまくして桃の花
迅き雲や潮騒とほき花大根
堰落つる水閃々と五月来ぬ
中空に川あるごとし鯉幟

かまくら

大橋弘子

白波の寄するも引くも春の音
暁好き箒も好きや昭和の日
葉隠れに白き椿や大石忌
春の日や勾玉形に猫眠る
鳥帰る近くて遠き国後へ
紫陽花や水神祀る染物屋
叡山の揺らぐばかりの蟬時雨
峰雲や一礼深く球児去る

青蔦の如く

加藤 榮一

如月や長谷大仏のうす衣
菜の花やベンチそれぞれ二人連れ
口なべてひらく燕や一番子
老鶯や森のしじまを深めをり
町中の丈余の芭蕉玉を解く
紫陽花や群がる傘の色あまた
青蔦や大樹を這ふにはばかり
せせらぎの橋の真中や月涼し

春の土

佐藤良二

群雀下りきてしばし春の土
ふれて見る樹齢いくばく梅の下
春の日や古筆に学ぶ古今集
仏塔のほとりに生ゆやふきのたう
をりをりに渡る小橋や水草生ふ
江の島へひと筋の水脈春逝けり
水切りを競ふ親子や夏来る
一編のドラマの余韻新茶汲む

瀬戸の里

波多野孝枝

煮 豆 屋 の 吊 り 電 球 や 春 寒 し
健 脚 に 道 を 譲 り て 青 き 踏 む
散 り 際 の 強 き 香 放 ち 紅 薔 薇
齋 の 膳 床 の 間 飾 る 白 牡 丹
軒 に 吊 り 一 夜 干 す 飛 魚 里 泊 り
湯 上 り や 漁 火 見 ゆ る 籐 寝 椅 子
観 音 の 裳 裾 揚 羽 の 見 じ ろ が ず
墓 洗 ふ 柄 杓 や 杉 の 香 の 立 ち ぬ

明け易し

和田慈子

もの芽や社に對の獅子頭
水平線余寒の紺を湛へをり
沖眩しきぶし鈴振る杣の道
西行に捧ぐる一枝山ざくら
露天湯や山氣ふるはす時鳥
笑ひ仏傾ぐ山路や遠閑古
水音を枕の旅寝明け易し
小流れに色を深めて四葩かな

鬼の子

阿部重夫

七つ目は日暮れとなりて福詣
縄文の遺跡抱きて山眠る
草萌や母の背を越す十二歳
星一つのみ輝くや今朝の寒
電線に物見の一羽燕来る
白子干す混じる小海老の色淡く
石段を跳びて帰る子春夕焼
鍬一闪旬の筍掘り上げぬ

白南風

遠藤清子

引き直す道の白線
冴返る
巻き癖の残る二月のカレンダー
水温む群れて重ぬる鯉の口
風少し尖りて今日の花見かな
禅寺にクルスの墓碑や松の花
濃淡も遅速も花の風情かな
円相の掛軸寂と風炉手前
赤牛の阿蘇や芒種の草千里

マロニエの花

及川照子

花 菜 畑 展 け る 先 の 海 の 青
菜 の 花 を 散 ら し 昼 餉 の パ ス タ か な
日 は 西 に 野 遊 び の 児 を 肩 車
曙 の 光 と け ゆ く 代 田 か な
マ ロ ニ エ の 花 と 暮 れ ゆ く 銀 座 か な
さ く ら ん ほ 青 春 の 香 の 喫 茶 店
夜 濯 ぎ や 遊 び 疲 れ の 心 地 良 く
強 き 子 に 育 て と 叩 く 天 瓜 粉

青葉風

榊山智恵

一湾を見下ろす城址若緑
亀鳴くや肩剥落の五智如来
葉巻もつ宰相像や涅槃西風
水田べり行く草笛のわらべ唄
桑の実の熟れて疎開の話かな
燻煙の合掌屋根や青葉風
山畑の豆の葉叩く白雨かな
棟上げに撒く祝餅豊の秋

笹 鳴

園 田 惠 子

春 潮 や 港 へ 急 ぐ 大 漁 旗
船 宿 の 明 け の 賑 は ひ 桜 鯛
蒼 天 や 一 村 染 む る 梨 の 花
春 暁 の 釣 宿 灯 り 潮 曇
連 翹 の 籬 に 添 ひ て 寺 の 道
舞 台 組 む 鳶 の せ は し げ 汗 滂 沱
夏 蓬 背 丈 程 な り 古 戦 場
代 搔 や 谷 戸 の 棚 田 の 動 き だ す

古都の冬

今村千年

阿弥陀への長き回廊冬紅葉
見返りの弥陀の目差小春風
初時雨インクラインへ坂がかり
夜もすがら格子戸佇ちぬ比叡風
鳴瀆に集ふ里人大根焚
南座に招きの上ぐる師走かな
顔見世や京の着倒れ紛れなく
顔見世の跳ねて花見の小路かな

年間優秀賞（平成二十七年）

乙矢集

優秀賞

騒めきは芽吹きのかかし柞山

森清

堯

青炎集

優秀賞

年の夜の闇へ打ち込む法鼓かな

大川

暉美

耕土集

優秀賞

まだ箱にある待春のべびー靴

渕田

則子

特別作品年間賞（平成二十七年）優秀賞

富士登山

長尾夕イ

一合目馬返してふ登山口
二合目を埋むる石楠花風静か
三合目緑したたる樹林帯
四合目緑蔭に入り昼餉とす
五合目や老鶯四方に鳴き交す
六合目砂礫にそよぐ蓼の花
七合目西日に染むる小屋泊り
八合目がれ場の道に汗滂沱
九合目足に重たき登山靴
頂上の鳥居くぐるや風涼し
星飛ぶや隣る寢息を肩に受け
修験者の法螺貝響く御来迎